神様の作り方【完結】

トマトルテ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遥か昔、出雲の国にて新たな神が生み出されようとしていた。

神の名は建御名方神（タケミナカタのかみ）。またの名を八坂神奈子（やさかかなこ）という。

神を生み出す方法は簡単。神降ろしの儀式として、1年を通して美しい少女を神と崇めて、最後に神そのものと為るように全てを神に奉げさせるだけ。そして、少女を神そのものとして扱うために、人々は穢れを知らぬ8歳の稚児を神官として少女に仕えさせた。

これはそんな少女と小さな神官の、1年間の記憶を記した物語である。

※神奈子様は神霊。ようするに元となった霊が居るので、その元となった少女と少年のお話を書きました。

三話で完結させる予定。後、年の差的におねショタとなります。

目　次

一話　神様との出会い　1
二話　神様と人間　10
三話　神の名は　19

一話　神様との出会い

「神奈子様、暇を頂きとうございます」
1人の年老いた男が座った状態で深々と頭を下げる。
その先に居るのは独立不撓の神、八坂神奈子。
男は彼女の神官として、その人生の全てを注いできた。
しかし、人間である以上は寿命というものがある。
「そう……貴方も、もうそんな年なのね」
それを良く知っているからこそ、神奈子も引き留めることはしない。
人と神では与えられた時間が違う。その事実を噛みしめ、僅かに悲しげな表情を見せるだけだ。
「これからは私の代わりに、諏訪の民と一族が神奈子様にお仕えしていくことでしょう」
「貴方は結局、生涯結婚しなかったから子孫が居ないものね」
「本来、神に仕える者は全てを神に奉げるものです。結婚などもってのほか」
「…そういう堅苦しい所は昔から変わらないわね」
三つ子の魂百までと言うべきか、昔から変わらない男の生真面目さに神奈子は苦笑する。
そして、空気を変えるように1つ咳払いをして、尊厳な声を出す。
「貴方とは出雲に居た時から、ここ諏訪に至るまで……いえ、私が生まれてからずっとね。本当に世話になりました。コホン――よくぞ、私の神官としてここまで仕えてくれた。礼を言おう」
「身に余る光栄です」
神としての威厳を見せながら、礼を言う神奈子に男は再び頭を深く下げる。
その姿は傍から見れば、主の言葉に感動して打ち震える忠臣そのものだろう。
だが、しかし。神である神奈子にはそれが嘘だということが分かっていた。

「……さて、貴方のこれまでの働きに免じて、すぐにでも暇(いとま)を与えたいところですが、最後に尋ねたいことがあります。1つ、いいかしら？」
「神のまにまに」
顔下げたまま微動だにせずに、理想の従者らしく神奈子の言葉を承諾する男。
その姿に、神奈子はやはり自分の勘違いではないかと思うが、疑いは捨てきれない。
彼女はあくまでも神の威厳を保ったまま堂々と男に問いかける。
「貴方、私のことを憎んでいるでしょう？」
男の肩がピクリと震える。
その反応に神奈子はやはりかと、小さくため息を吐く。
「はぁ…気のせいだと思いたかったけど、その反応を見るに当たりね」
「……いつから、お気づきで？」
隠し立ては出来ないと観念したのか、静かな声で男が問いかけてくる。
しかし、それでもなお男は顔を上げようとはしない。
「貴方が私に仕え始めた時からずっとよ。あなたの信仰は強く、そして歪んでいたから」
「…ッ！　……それではなぜ？　なぜ私(わたくし)めを罰そうとしなかったのですか？」
最初から知られていた。その事実に、男は声を震わせる。
だが、返ってきた答えは男とは正反対のどこまでも堂々としたものだった。
「――愚か者。私が何者かを忘れたのか？　我は神。人間の願いを、怒りを、悲哀を、憎悪を受け止める存在。例え、自らの神官からの憎しみであったとしてもそれを受け止めてやるのが神としての務めだ」
神としての在り方。
神とは理不尽の権現。人間の手には負えぬ自然現象や畏(おそ)れの具現化。

それ故に人間は神に対して祈るだけでなく、時に行き場のない怒りや嘆きをぶつける。
地震や津波、果てには豪雨による土砂崩れ。誰も何も悪いことはしていないのに起こる災害。その度に人間はそれを神の仕業にしてきた。神の怒りをかったことにしておけば、信心深く生きれば、次の災害は避けられる。神の仕業にすれば振り上げた拳を下ろす場所が見つかる。
人は分からないという理不尽から逃れるために、神という理由を求めたのだ。
「……御見それいたしました。今の今まで隠せていたと思いこんでいた卑小な自分が恥ずかしい」
「御託はいいわ。私が本当に知りたいのは、貴方がなぜ私を憎んでいるのかということよ」
「それを知って一体何になるというのでしょうか？」
どうせ後は死ぬだけの人間のことなど知っても仕方がない。
そう暗に告げる男だったが、神奈子の次の言葉に目を見開くことになる。
「貴方が救われる」
予想だにしなかった言葉に、思わずといった様子で顔を上げる男。
そんな男の姿に僅かに頬を緩めながら、神奈子は喉を鳴らす。
「このまま心に悪いものを溜めたまま死ぬのは良くない。その負の感情は必ず、輪廻の果てまでつき纏うことになるでしょう。吐き出しなさい。私の神官としてではなく、神の理不尽に嘆く1人の人間として全てを曝（さら）け出しなさい。それが貴方を救うことになるのです」
神に仕える神職としてではなく、1人の人間としての想いを吐き出せ。
その抗い難い誘惑にも、男はしばらくの耐えるように黙っていたが、やがてポツリと語りだす。
もう、これが最後なのだから言わねば後悔するだろうと。
「……神奈子様、あなた様は神霊です。純粋な信仰によってのみ存在する諏訪子（すわこ）様とは違う」

「ええ、知っているわ。神霊は個人か集団かは分からないけど元となった霊が存在が居る存在」
「はい、その通りです。そして、神霊はただの人間の霊が簡単になれるものではありません。仮にも神となるのだから、敬われる必要がある。畏(おそ)れられる必要がある。何より、神と呼ばれる必要がある」
男はそこで一度話しを切り、昔を思い出すように遠くを見つめる。
神降ろしの儀式。神を人間に宿らせる、全ての発端のになった儀式を思い起こしながら。
「……そうした霊を作る方法は難しいように見えて、実際は至極簡単なのです。神降ろしの依り代、〝器〟とでも呼ぶべきでしょうか。ともかく何者かを選び、降ろしたい神そのものとして生前から畏れ敬えばいい。そして――――最後に殺せば、空になった魂の器に神が宿るのです」
ヒンヤリと冷たい空気が神奈子の首筋を撫でる。
分かってしまったのだ。これだけの話で聡(さと)い彼女は全てを理解した。
男が神奈子に向ける信仰には3つの感情が複雑に絡まっている。
1つは掛け値なしの純粋な敬意。
2つ目は抑えようとしても抑えきられずにいる理不尽への憎しみ。
そして、3つ目は。
「さて、少々長くつまらない話ですがお聞きください。恋した少女を殺した愚かな少年の話を」
憎しみの裏に潜んだ、歪み切った愛。

「私(わたくし)が、今日から神為子(かなこ)様の身の回りの世話をさせて頂く神官です」
「あら、もっと年上の人が来るかと思っていたけど、随分と可愛らしい神官さんね。年はいくつ？」
「今年で8歳ですが…」
「8歳！　その年で神官になれるなんて凄いわね」
「いえ、しきたりのようなものですので別にそこまでは……」

元旦。年の始まりの日。
そんな日に山の頂に作られた社(やしろ)で、1人の年若い少年が座った状態で深々と頭を下げていた。
その先に居るのは椅子に腰かけた1人の美しい少女。
深い藍色の髪に、宝石のような赤い瞳。胸には神聖なものを示す鏡を置く様はまさに女神。
だが、しかし。その美しい姿形には欠落した部分が見られた。
神に奉げるように潰された右目。逃げ場を奪うように折られた右足。
それらが少女の神への捧げものとなる運命を如実に表している。
「何はともあれ、今日から一年間……『神降ろしの儀式』の日まで私(わたくし)が神官として神為子(かなこ)様に仕えさせていただきます」
しかしながら、少年は少女の歪(いびつ)さを見ても表情を変えない。
むしろ、ミロのヴィーナスを見るかのように、体の欠落そのものに神聖さを感じる程だ。
ただ美しいだけでは神格は生まれない。
その言葉を証明するように少年は、美しさの中にある歪みに神を感じていた。
「うーん…固いわね。これから一緒に過ごしていくのだからもっと気楽にしていいのよ?」
「いえ、そのような畏れ多いことはとても……私(わたくし)は神官。神の従者ですので」
だが、少女の方からすれば神官と言えど8歳は8歳。
元服もしていない、弟のような年頃の子供にかしこまられても困る。
「そうは言っても、私は正確には神様じゃないわ」
「めっそうな。新たに生まれる大国主命(オオクニヌシのみこと)の御子(みこ)の器(依り代)として選ばれた神為子(かなこ)様は神も同義。畏れ敬うのが当然のこと」
少女は自分は神ではないと告げる。しかしながら、少年がそれに対して頷くことはない。ある意味でそれは当然のことだろう。少年の一族は出雲の国で長年に渡り神に仕えてきた。今回の神降ろしの儀

式も、明確な姿を持ち、より強い信仰を受ける新たな神を生み出すという大国主(おおくにぬし)の神託でしかない。
故に少女は知っている。自身は意図的に実体を持った神、神霊を生み出すための生贄だと。
「……私は人間なんだけどな」
それが分かっているために、少女はポツリと本音をこぼす。
望む望まずにかかわらず、神に奉げるという確定した未来を憂えて。
「いかがなされましたか？」
「いいえ、何でもないわ。そうね、いきなりは難しいわよね。貴方との距離は時間をかけて縮めていくとするわ」
「はあ……」
何事かと問いかけてくる少年を誤魔化し、少女は冗談交じりに言う。
そんな少女の言葉に、生真面目な少年は自分はどうすればいいのだろうかと眉を寄せる。
そんな初めて見せた少年の年相応な姿に、少女はクスリと花のような笑みを零すのだった。

春。山の社の木々や花も芽吹き、眠っていた生き物たちが目を覚ます季節。
少年が少女に神官として仕え始めてから、数週間が経とうとしていた。
「一緒にお風呂気持ちよかったわね」
「う…そ、そうですね。神為子(かなこ)様」
「洗いっこもしたかったのに、神官さんが恥ずかしがるからできなかったわ。せっかく洗ってあげようと思ったのに」
風呂上がりに縁側で涼しみながら、櫛で少女の髪を整える少年。
彼の顔がほんのりと赤くなっているのは、恐らくは湯上りのせいだけではないだろう。

それが分かっているためか、少女の方もからかうように少年へと声をかけている。
「あ、あれは恥ずかしかったわけではなく、神為子様にそのような雑事をさせる訳にはいかなかっただけです。決して！　断じて！　恥ずかしかったわけではありません！」
だが、まだ幼い少年はそれを理解することが出来ずに必死に否定する。
むしろ、その行為が彼女を楽しませることになるのだと気づくこともなく。
「あらそう。だったら、今度は命令してやらせてもらおうかしら」
「え？」
「恥ずかしいわけじゃないんですから、私からの頼みなら問題はないわよね？」
「いや、しかし…やはりそういったことを神為子様にしてもらうのは……」
「私がやりたいって言っているのだから、問題はないと思うわ」
少女の髪を整える手を止めて、固まってしまう少年。
恐らくは必死に言い訳の方法を探しているのだろう。
しかし、こういうものは時間をかければかける程に不利になるものだ。
「……もしかして、私に触れられるのは嫌かしら？」
「めっそうもございません！　神為子様に触れて頂けるのは身に余る光栄です！」
悲しそうな声で少女が言ってみれば、少年は大慌てで否定する。
なので、そこにつけ込むように少女は追撃を行う。
「だったら、普段から頑張っている神官さんへのご褒美に、私が洗ってあげてもいいわよね」
「え、いや、その…」
「あら、私からの褒美は受け取れないのかしら？」
そして、止めにこの言葉だ。
少年には既に彼女の言葉を拒否する選択肢はない。

己の未熟さを恨むようにガックリと肩を落としながら、少年は首を垂れる。
「……謹んでお受けします」
「ふふふ、次のお風呂が楽しみね」
今から想像するだけで憂鬱だと言うような声を出す少年を笑いながら少女は思う。
初めの頃から比べて随分と固さが抜けたなと。
やはり神官といえども8歳の稚児。
肩ひじを張った堅苦しい対応を取り続けられる程慣れていないのだろう。
従者としては未熟と言えるだろうが、兄弟が居ず弟が欲しかった少女にとってはそちらの方が余程好ましかった。
「そう言えば…どうして、8歳の神官さんが私に仕えることになったのかしら？　もっと年上の人とかは居なかったの？　あ、神官さんに不満を抱いているとかじゃないわよ。純粋に疑問に思っただけだから」
そして同時に思う。どうして、このような年若い少年が自分の世話係に選ばれたのかと。ときおり、子どもには難しいような力仕事などは大人がやっていったような形跡があるが、他の人間が彼女の前に姿を見せることはほとんどない。ここまで徹底されていると気にもなってくるというものだ。
「そうですね…何でも、神に仕えるのは穢れ？　を知らない子どもでなければならないらしいです。なので、まだ子どもの私が選ばれたのです」
「なるほどね……確かに神官さんは穢れからは遠く離れていると思うわ」
「ありがとう…ございます？」
穢れとは一体何を指すのか分からないために、首を傾げながら礼を言う少年。
そんな姿に少女はバレない様にクスリと一つ笑い、ポンポンと自分の膝を叩く。

「さ、私の方は終わったから、ご褒美に今度は神官さんの髪を梳(と)かしてあげるわ」
「そ、そんな畏れ多いです。というか、膝の上で寝たら髪を梳かすなんて出来ないのでは…？」
少女からの膝枕の提案に面白い程に動揺し、即座に断ろうとする少年。
だが、その程度では少女は諦めてはくれない。
「いいから、いいから。私がやりたいだけだから無礼でも何でもないわ」
「そうは言われましても……」
「ね、お願い？」
少年にも少女がただ、おままごとのように姉の気分を味わいたいだけだというのは分かった。
しかし、少女に両手を顔の前で合わせて頼まれれば、もう逃げることなど出来ない。
神官としての立場や、神への無礼という言葉が頭に浮かんでくるが無駄だ。
仕えるものが主に、いやもっと言えば男が女にこのような頼まれ方をすれば頷くしかない。
「……神のまにまに。どうぞご自由に私(わたくし)の髪をお触りください」
「ふふふ、そこまで硬くならなくてもいいのに」
まるで切腹をするような顔で膝に頭を乗せる少年に、少女は頬を緩ませて優しくその髪を撫でてやるのだった。

二話　神様と人間

夏。蝉の声が山に染み込み、雨が草木を茂らせる一年で最も暑い季節。

少年が神となる少女に仕えて二つ目の季節になったある日のことだった。

「お願い！」

「ダメです」

「どうしてお祭りの踊りに参加させてくれないの!?」

「いや、神為子様は舞(まい)を奉納される側でしょう。自分で自分に向けて踊ってどうするんですか」

何やら必死な様子で頼み込む少女に、何を言っているんのだという顔でいなす少年。

少女は祭りで行われる神へと奉げる舞をしたいと言っているが、それは無理な話だ。

祭(祀り)りや舞というものは、そもそもが神に奉げるものである。

だとするならば、神として扱われ、そしていずれ神に為る少女は踊りを受け取る側だ。

少年から見れば彼女が自分で踊るというのが、てんでおかしな行為に見えるのも無理はない。

「むしろ、神為子様は祭りの主役なのですから特等席で村人達の踊りを見てください」

「それは分かっているのよ…」

「……それに大変失礼ですが、この山を昇り降りするのにも苦労する神為子様の足では、踊るのは無理でしょう」

「そう…ね」

まだ納得できないという表情の少女に対して、幼い少年は無垢な残酷さで現実を告げる。

少女の方も残った左目で自身の折られた右足を見つめ、静かに息を吐く。

今も神官である少年の世話を受けなければ、生活すらままならない

片足で踊れるわけがない。
「お分かりいただけましたか？」
「ええ…何の苦労もなく坂を昇れたあの頃とは違うのね」
ここまで言われれば観念する以外に道はない。少女は俯くように少年の言葉に頷く。
「……しかし、何故そこまで食い下がったのですか？」
だが、そのような余りにもの悲しい仕草を見せられると、少年の方も流石に動揺して理由を尋ねてしまう。
「…私もこのお祭りは毎年楽しみにして踊っていたから……」
「神為子様……」
そして、神官として聞かずとも良いことを聞いてしまう。
神官ならば、ただ少女を神として扱っていれば良かった。
だが、少年は彼女が人間として生きていたという事実を知ってしまった。
「……神為子様が踊ることはできません」
「ええ…そうね」
「ですが。人として祭りに参加することは出来るかもしれません」
「え、どうやって？」
「単純な話です。神為子様と分からなければいいのです」
だから、少年は何とか少女の悲しみを取り除こうと思う。
それが、神官としての領分を越えているということに気づくことなく。

「えー、お面。お面はいらんかー」
「私と分からないようにするって、こういうことだったのね」
松明が焚(た)かれ、櫓(やぐら)の上では楽器が打ち鳴らされ人々はその明かりと音に集まってくる。
それは毎年の光景であるが、今年は少しだけ様相(ようそう)が違う。
お面をつけている人間が例年もよりも多いのだ。
「お面には2つの目的があります。1つは顔を隠し何者かを分からなくすること。2つ目は別の何かに…神に為りきるために使うこと。

すなわち誰が神で誰が人かを分からなくするということです」
狐を模したお面を被る少年が、同じようにお面を被った少女に説明する。
お面は顔を隠す。そうすることで、例え神が混ざっていたとしても気づかせない。
お面は人を別の何かに変える。そうすることで、神を人間へとすることも出来る。
そうした理由で、少年は多くの者にお面を配って少女の正体を隠すことにしたのだ。
「確かにこれなら私とバレずにお祭りを楽しめそうね」
「もちろん、神為子様は祭りの主役ですので最後には必ず顔を出していただきます。ですが、それまでは自由に祭りを回っても大丈夫なように手配しました」
「嬉しいわ。褒めてあげるわよ、神官さん」
仮面の下で若干胸を張ったような少年の頭を、少女は感謝の念を込めてグリグリと撫でる。
すると、仮面の下でもハッキリわかる程に耳を赤くして少年が飛び退く。
「か、神為子様、そういったことはおやめください！」
「あら？　嫌だったかしら」
「い、嫌ではありませんが……」
クスクスと笑いながら少女が問いかけると、少年は困ったような声を出して首筋を掻く。
それが面白いので、少女はさらに少年に追い打ちをかけるようにいじる。
「うーん…呼び方も変えた方がいいかしら」
「呼び方ですか？」
「ええ。『神為子』って名前だと私だってバレるじゃない」
「そう言われるとそうですね……では、何か別の呼び方をしましょう」
少女の指摘にそれはもっともだと頷く少年。
この時点で、少女の策略に嵌ってしまっているのだが気づけない。

「そうよね。だから、今日一日は私のことを――――お姉ちゃんって呼びなさい」
「お、お姉ちゃん!?」
余りにもな命令に思わず、叫び声を上げてしまう少年。
その声に周りの人間が何事かと目を向けてきたので慌てて口を閉じるが、バレた様子はない。
「ほら？　今みたいにお姉ちゃん呼びならバレないのよ」
「い、いや、確かにバレませんけど、そんな呼び方をするのは少し……」
お姉ちゃんという言葉に恥ずかしがって、首筋を赤くする少年の様子を楽しみながら、少女はさらにたたみかける。
「それとも私がお姉ちゃんなのは嫌かしら？」
「そんなことありません！」
「だったら、決定ね。祭りが終わるまではお姉ちゃんと呼びなさい。いい？　これは命令よ」
「え、いや、その……わかりました」
主(あるじ)に、しかも年上の女性にここまで言われれば、断るということなど出来はしない。
それが男という悲しい生き物である。
少年はそんな抗えない現実に俯きながら、また1つ成長したのだった。
「さて、それじゃあ祭りを一緒に楽しみましょう、神官さん」
「……神のまにまに」
そうして、少女と少年の最初で最後の祭りが始まるのだった。

「あー、やっぱり祭りは楽しいわね。ただ見ているだけでもワクワクした空気が伝わってくるわ」
「神為子様に楽しんでいただけたのなら、村の者も望外の喜びでしょう」
「ダメよ。私の呼び方は何だったかしら？」
「お、お姉ちゃん…が楽しんでくれたのなら望外の喜びです」
「よろしい」

よしよしと少年の頭を撫でながら少女は満足そうに笑う。そのため、少年は文句を言うことも出来ずに悶々とした表情のまま俯くことしかできないのだった。
「あら、そろそろ中央広場に行かないといけない時間ね」
「そうですね。神に奉げる踊りが始まる時間ですので、神為子様が居なければなりません。今年は特に神降ろしの儀式が、踊りも盛大なものになるそうです。楽しみにしておいてください」
「……そうね。私に奉げる踊りなのよね」
言ってから、お姉ちゃんと呼んでなかったことに気づく少年だったが、少女は何も言わない。
まるで、楽しい時間はこれで終わりだとでも言うように、ただ人混みを見つめている。
それが恐ろしく儚げに見え、消えてしまうのではないかと思ったので少年は声をかける。
「神為子様…？」
「今までは、私も人間として神に奉げる側だったのに不思議なものね」
後悔も恨みもない。ただ、寂しさだけが耳に残る小さな呟きだった。
だが、そんな呟きだからこそ、少年の心に鉛のように重い何かを残していく。
「さ、主役が遅れるといけないわ。早く行きましょう、神官さん」
「……はい」
彼女は神様ではなく、本当はただの人間ではないのかという、抱いてはならぬ疑問を。

秋。木の葉は赤く染まり、食物は実りの時を迎える。
故に人間は今年の収穫に感謝し、また来年もと願いを込めて神への感謝を告げる。そんな季節。
「神為子様、また紅葉を見ておられるのですか？」
「ええ。何度見ても、山の頂上から見る木々の色合いは別格よ」

夕日が山や空を橙(だいだい)色に染め、その光に反射した楓(かえで)や銀杏(いちょう)の葉が美しく輝く。そんな光景を片目で見つめながら少女は唇の周りを穏やかに緩める。
「神為子様は木々を見るのがお好きですね」
「うーん…木、というよりかは山そのものかしらね。山は季節や時間で色んな表情を見せてくれるし、坂も登り切った時に達成感があるから好きよ」
「だから社(やしろ)もこんな山のてっぺんに作ったんですね」
「作ったのは私じゃないけど、ありがたく思ってるわ。まあ、この足じゃ神官さんが居ないと色々大変だけど」
自身の折れた右足を撫でながら少女はほんの少しの不満を言うが、そこに険はない。
どこか悟りに似た穏やかさがあるだけだ。
「ねえ、神官さん。木の名前は誰がつけたと思う？」
「木の名前ですか…？　どうして急にそんなことを？」
そんな問いかけに少女の隣に立って、山の木々を眺めていた少年は不思議そうに首を傾げる。
「ふと、疑問に思っただけよ。それよりも貴方はどう思うかしら？」
「どう…と言われましても。神様のような偉い人が呼んだものが広まったのではないですか？」
また自分をからかおうとしているのかとも思うが、主の質問に答えないわけにもいかない。
少年は漠然とした意見ながらも、しっかりと少女へと返答する。
「じゃあ、神様の名前は誰が決めたのかしら？」
「それは……」
「あら、少し意地悪な質問だったかしら」
しかし、その答えをさらに突っ込まれてしまい、少年は困ったように黙り込む。その様子に愛らしいと笑いながら、少女は少年を自分の隣へ座るように手招きする。それに対して少年が素直に従うのは、親しくなったからか敬意が薄れたからかは2人にも分からない。
「私はね、神様の名前は人間が決めたのだと思うわ」

「人間がですか？　そんな畏れ多いことを本当に？」
「ええ、本当よ。だって人間が生まれたことで初めて神と人を区別する必要ができたんだから」
「だとしても、呼ばれる際に名前がないと困るので、最初から名前ぐらい付いていたのではないでしょうか？」
　少女の言葉に本当にそんなことがあり得るのかと懐疑的な目を向ける少年。
　そんな少年の頭を撫でながら、少女は話を続ける。
「あったでしょうけど、きっと今みたいな仰々しい名前では無かったわ。太郎、次郎みたいな簡単な名前だったかもしれないわね」
「そんな馬鹿な…」
「あら、同じ神様同士なんだから変に敬わなくても、誰かが分かれば良いでしょ？」
　ニコニコと笑いながら自分の考えを告げていく少女。
　少年は彼女のそんな姿に本気で言っているのかと思ってしまうが、当の神様本人が言っているのだから信じるしかない。
「でも、人間が神を呼ぶ際にはそうはいかない。自分達の信仰心を示すために、何より崇（たた）られないように、神へ仰々しい名前をつけていったのよ。大国主命（オオクニヌシのみこと）だって書くと凄く偉そうに見えるでしょ？　でも、初めの頃はクニみたいな簡単なものだったかもしれないわ」
「いや、流石にそれはどうかと思います」
　あきれ顔で少女の言葉を否定する少年だったが、少女がやけに確信を持って言っているのだけは気になった。名前の由来など多くの人は知ろうとも思わない。ただ、みんながそう呼んでいるからという理由で呼ぶのが普通だ。そこに疑いなど生まれはしない。
「それにしても、やけに自信満々に語りますね。何か証拠でもあるんですか？」
　だというのに、少女はどうしてそんな所に疑問を抱いたのか。
　そう思って、少年は子どもらしい軽い好奇心で聞いてしまう。
　後に、聞かなければよかったと一生後悔してしまう内容を。
「それは……私自身が元の名前から今の名前に変えられたからよ」

「…え？」
予想だにしなかった言葉に思わず、少女の顔を凝視してしまう少年。
彼女の顔はまるで迷子の子供のように、寂しげなものであった。
「神為子（かなこ）って名前は、私の本当の名前じゃないのよ。神降ろしの依り代になると決まった時につけられた名前。私はみなしごだけど、それでも自分の名前はあったわ」
神降ろしの依り代となる人間の名前が、太郎や花子では格好がつかない。
だから人は、依り代に相応しい名前をつける。
まるで、依り代が送ってきた人間としての人生をかき消すかのように。
『神（かみ）と為（な）る子（こ）』。これが神為子の本来の意味。別に私じゃなくても、この名前は使えるの。……ただ、神様の器になることが決まってさえいれば」
「神為子…様……」
少女は、人間として普通に生きていた日々を思い起こすように遠くを見つめる。
親は居なくとも、人間として毎日を一生懸命に生きていた日々を。
自分という人間がまだ確かに存在したあの日を。
そんな余りにも儚げな姿に少年は何も言えずに、ただ彼女の横顔を見ることしかできなかった。
「……と、ごめんなさいね。急に変なことを言って」
「いえ……神の名前は人間がつけるというお話はとてもためになるものでした」
「あくまでも私の考えよ？　でも、気に入ってもらえたのならよかったわ」
まるで、さっきの話は忘れてくれとでも言うように苦笑する少女に、少年は顔を歪ませる。
幼い彼には何をすればいいのか、何を言えばいいのか分からなかったのだ。

いや、どれだけ年をとっていたとしても正解は分からないだろう。
だとしても。
「さ、今日は冷えるしお酒でも出してくれるかしら、神官さん？」
「……かしこまりました、神為子様」
少女の本当の名前を聞かなかったのは間違いだったと、少年は何度も何度も悔やむことになるのだった。

三話　神の名は

冬。雪が山を覆い、命は消えたのかのように息を潜める。
人にとっては自然の猛威を最も身近に感じる季節であり、一年の終わりとして特別視する季節。
故に、『神降ろしの儀式』を一年の最後の日に持ってきて、次の年の始まりの日を『新たな神の始まり』にしようと人が考えるのは自然なことだろう。
「神為子様、どうぞ御柱（おんばしら）の中央に進み出てください」
村の長老の重く低い声が、夜の闇に静まり返った社の広場に響き渡る。
そして、その声に従って少年に支えられながら、少女が用意された舞台へと上がっていく。
部隊の四角（よすみ）にはそれぞれ長さの違う御柱（おんばしら）が建てられており、見る者からすれば中央に向かう少女は5本目の御柱のように映る。否、実際に少女は5本目の柱なのだろう。
人柱（ひとばしら）という名の。
「神為子様…」
「なにかしら、神官さん？」
一歩、一歩。王の御膳に向かう勇者のように堂々と。
重く、重く。処刑台に向かう死刑囚のように緩やかに。
御柱で囲まれた中心に歩いていく少女に、少年が怯えたように声をかける。
「神為子様は……神様に為るんですよね？」
疑うように、縋るように少年は問いかける。
1年前であれば疑いもしなかったことだが、今は違う。
少女と共に過ごしていく中で愛情が湧き、神としてではなく1人の人間として見ていた。
それ故に少年は、少女がどこか遠くへ行ってしまうことを恐れているのだ。
「……ええ。私は神に為る子よ」

「そうですよね！　だったら平気です。私(わたくし)はずっと神為子様に仕え続けます」
「そう…それは神様も喜ぶと思うわ」
何も疑うことなく、これからも少女と共に過ごしていけるのだと信じて笑う少年。
しかし、幼い少年は気づかない。少女が少女のままに神に為るのだと誤解している。
彼女は依り代。あくまでも神を宿すための器に過ぎない。
そして、器に神(別の物)を入れるためには、元々入っていた人(物)を捨てなければならない。
そんな大人に隠された事実を疑うことすらないのだ。
「これが、神官が穢れを知らない子どもでなければならない本当の理由かしら……」
残った左目で憂(うれ)うように少年を見つめ、少女はポツリと言葉を落とす。
無邪気な子どもであれば、どれだけ依り代に情が湧いても神様に為るという言葉を信じられる。
間違ったことはしていないと大人を漠然と信じ、大好きな人を処刑台の前に引きずってこれる。
偏(ひとえ)にそれは、大人の穢(汚さ)れを知らない幼さが故に。
「神為子様…？」
「ねえ、神官さん。神様の名前は誰がつけるかって話は覚えている？」
「ええ、覚えていますよ。人が名付けるんですよね？　ですが、それがどうかいたしましたか」
少女が唐突に話題を変えたことに不思議がる少年だったが、彼女の真意には気づけない。
「私が神様に為ったら…貴方が名前をつけてくれる？」
「私(わたくし)がですか…？」
自分がそんな畏れ多いことをして良いのかと不安に思い、少年は少女の顔を下から覗き込む。
しかし、いつもならば諦めるであろう少女は今回ばかりは譲らな

かった。
少年へと優しく微笑みかけ、自身の願いをハッキリと告げる。
「いいえ、私は貴方に名をつけて欲しいの。私の神官である貴方にだからこそ頼むのよ」
「…！　神のまにまに。そのお役目、謹んでお受けいたします」
彼女の笑みに普段とは違う何かを感じ取ったのか、少年は何も言わずにその言葉を受け入れる。
そのハッキリとした言葉に少女の方も安心したのか、少年から手を離し自分1人で中心に立つ。
そして、背を向けたままに最後の言葉をポツリと呟く。
「……私のことを忘れないでね」
「え…？」
思わず今の言葉はどういう意味なのかと、問いかけようとする少年だったが、少女の背中からただならぬものを感じ取り口を閉ざしてしまう。それも当然のことだろう。ただの子供が、死に向かって自ら歩いていく人間に声をかけられるはずもない。

「只今より、神降ろしの儀を執り行う」

少女の美しく、それでいて重い言葉が夜の山一帯に響き渡る。
そして、少年の一族の大人達が小難しい祝言（しゅうげん）を次々に述べていく。
少年にはその言葉の意味など半分も分からなかったが、何か理解できない存在が近づいてくる感覚だけは肌で感じ取っていた。
「あれは…雲…？」
少年がふと気づくと、山の頂よりも遥かに高い夜空に巨大な雲が集まり始めていた。
その雲を見た瞬間に少年は直感する。あそこに神が居るのだと。
「大いなる大国主命（オオクニヌシのみこと）よ、我が信仰を受け入れるのならば…どうか我が魂に御子（みこ）を宿し給え」
「神為子様の真上に雲が集まってる……」
季節外れの大雲は少女の真上を中心にして、蛇のように渦巻いてい

き雷が空を照らす。
それはまさに人知を超えた現象。神の御業(みわざ)。
少女を依り代に神が降りてくる証拠である。
『幸魂奇魂守給幸給(さきみたまくしみたままもりたまえさきはへたまへ)』
出雲の民が祀(まつ)る、大国主命(オオクニヌシのみこと)への神語が唱えられる。
そして、その声に応えるように、暗雲から少女目掛けて雷が、落ちる。

――死にたくないよ。

最も高い御柱に雷が落ちた瞬間に、少年は少女の口がそう動いているのを見てしまった。
「え…？」
呆然と声を零す少年を待つことなく、雷は高い御柱から低い御柱へと移り渡っていく。
そして、最も低い人柱(はしら)である少女に降りかかる。
「――――ッ」
その瞬間、少年は声にならない悲鳴を聞いた気がした。
神の雷によって一瞬で体を焼き尽くされる少女が、少年の目に焼き付く。
ここでようやっと少年は理解する。神降ろしとは、用意した器に神を宿らせる行為。
即ち、少女はその全てを神の器として奉げたのだと。
「器にものを入れるには…既に入っているものを捨てなければいけない…」
そもそも、人は神の血縁でもなければ生きながらに、神を身体に宿し続けることなど出来ない。
本来、人と神の差とはそれ程までに遠いものなのだから。
ならば、どのようにして神との距離を縮めればいいのだろうか。
神は生者よりも死者に近い存在だ。死んで神に出会うという話からも、良く分かるだろう。

そう。手っ取り早く、人間が神に近づくには死ぬのが一番なのだ

「神為子様…ッ！」

だから少女は死ななければならなかった。

死ぬことで神に近づき、魂の器に神を招くことで初めて、神と為る権利が与えられる。

しかしながら、人の魂という器は２つのものを入れるには余りに小さい。

故に、まずは器の中身（少女）を完全に捨てなければ（殺さなければ）ならない。

死ぬことで肉体を奉げ、死後の霊魂となった後も魂（中身）を捧げる。

そうして、最後に残った器に神が入ることで、少女は神霊と為るのだ。

――もっとも、その存在を今までの少女と呼んでいいかどうかは分からないが。

「神為子様が死んだ…？　私（わたくし）が殺した…？」

だが、そんなことなど今の少年にはどうでもよかった。

彼はただ、雷が巻き起こした炎の中心を表情の失った顔で眺めることしかできない。

少女が死んだことを、自分がこの手で処刑台へと導いてしまったことを理解したく無いが故に。

「あれを見ろ！」

そんな折、誰が零した声か分からない言葉が状況の変化を知らせた。

「風が…炎をかき消していっている…？」

そのまま永久に燃え続けるかと思われた炎が、突如として現れた疾風にかき消され始めたのだ。

再びの明らかに人の手ではない御業に、その場にいる誰もが息をするのも忘れて炎を見つめる。

そして、全ての炎が風に消えたとき。

４本の御柱の中心に、背筋が冷たくなる程に美しい少女の姿があった。

「神為子…様？」

炎の中から無傷で現れた少女の姿に、少年は駆け寄ろうとするがすぐにその足を止める。
気づいたのだ。少女が無傷であるという不自然さに。
「我を呼び出したのは汝らか、礼を言っておこう」
少女と全く同じ顔で、しかし少女とは比べ物にならぬ程に威厳のある声を出す存在。
その瞳はどちらも潰れておらず、完璧な美しさを保っており、両足もまた健在であった。
つまり、彼女は右目と右足を潰された少女とは違う存在であるのだ。
「我は大国主命（オオクニヌシのみこと）の子。軍神であり、風の神でもある」
「あれが…神様…」
「さあ、どうしたの？　呼び出すだけ呼び出して終わりとでも言うつもりかしら？」
どこまでも不敵で、それでいて神々しい笑みを浮かべて神が問いかける。
それに対して大人達は何か言葉を返さねばならないと、口を動かすが何も出てこない。
彼女の醸し出す圧倒的なオーラに圧倒されてしまっているのだ。
だが、そのような時でも動くことが出来るのが子どもの強みである。
「神様…」
「何かしら？　小さな神官」
一向に動き出すことのできない大人達を尻目に少年は前に進み出て、神の前で跪く。
「……お名前をお教えくださいますか？」
そして、神へとその名を尋ねる。
目の前の神様が少女であれば応えられるはずの質問を。
「ふむ…名前ね。残念だけどその質問には答えられないわ。生まれたばかりでまだ無いもの」
「左様ですか……」

ここで少年の淡い希望は完全に崩れ去る。
目の前の神様には、少女としての記憶など残っていないのだと。
否、少女は死に。新たに少女とは違う存在である神が生まれたに過ぎない。
残酷な現実が、少年の心を今にも叩き壊さんと押し寄せてくる。
自分が少女を死の道に案内してしまったという事実に、少年は今にも吐いてしまいそうだった。
だが、しかし。そんなことは罪深い自分には許されない。だから、せめて。
「……でしたら、私(わたくし)がおつけしてもよろしいでしょうか？」
少女の最後の願いを叶えよう。少年はそう、歯を食いしばりながら心に誓うのだった。
「なッ!? 神の名は建御名方神(タケミナカタのかみ)だと大国主命に言われたのを忘れたか！」
「出過ぎた真似だぞ！ 申し訳ありません、神よ。すぐに下がらせますので」
しかし、そんな少年の心など知らずに大人達は大慌てで少年を下がらせようとする。だが。
「構わん」
神による鶴の一声で黙らせられる。
静かな声だったにもかかわらずに、波を打つように広がっていく神への畏れ。
それを満足気に感じ取りながら、神は己の足元で跪く少年を見下ろす。
「ただし、それ相応のものを期待するわよ？」
「かしこまりました。では、早速」
首筋に刀を押し付けられている。
思わず、そう錯覚してしまう程のプレッシャーが少年を襲うが、それでも彼は揺らがない。
ただ、静かに殺してしまった少女へ想いをはせながら語っていく。
「まず、性は山で生まれたが故に、山を意味する〝八坂〟がよろしいか

と」
「ふむ…続けなさい」
少女は山が好きだった。そこに生える木々が好きだった。そして、坂を昇るのが好きだった。
だから、少年は無数の坂を、山を意味する〝八坂〟と告げた。
「そして、名は『神、大いに示す子』と書き――」
最大限に神への敬意を払いながら、しかし生贄となった少女を忘れないように。
少年は静かに告げる。
「神奈子（かなこ）。八坂神奈子（やさかかなこ）という名がよろしいかと」
神へ仕え続ける限り、決して少女のことを忘れぬ名前を。

「そうして、八坂神奈子という名を私に贈ったのね……」
「はい。『八坂』は少女が好きだった山を現し、『神奈子』は少女の名前の音をそのまま生かせるようにしました」
昔話は終わり、かつて少年だった年老いた男が神奈子の前で頭を下げている。
それが男なりの主への謝罪なのだろうが、頭を下げられた神奈子の方は困った顔をしている。
「建御名方神（タケミナカタのかみ）より女性らしいから、選んだのだけど……そりゃ女性らしい名前よね」
「返す言葉もありません。今からでも建御名方神（タケミナカタのかみ）にされますか？」
「別にいいわ。そっちの名前は建前として使っているし、神奈子の名前にも愛着があるわ」
「左様ですか」
そう言ったきり、黙り込む2人。
お互いが、それ以上に何を言ったらいいのかが分からずに、口を開くことが出来ないのだ。
しかし、このままでは話が進まない。故に、沈黙を破ったのは話を進めたい神奈子の方だった。

「それにしても……これが貴方が私を恨む理由だったのね」
「……お恥ずかしい限りです。少女を処刑台に送ったのは私(わたくし)自身だというのに、あなたに八つ当たりをしている。…神さえ居なければ、少女は生きていられたと責任転嫁をして、自分の罪から目を逸らそうとしている穢れた人間なのです。本来ならば、あなた様に仕えることなど許されない身……神奈子様。どうか私(わたくし)に罰を」
すると、今度は堰(せき)を切ったように男は懺悔の言葉を溢れ出させる。
まるでそれは、今の今まで吐き出すことのできなかった毒のようであった。
「罰…ね…」
「はい。私(わたくし)は神奈子様に仕える神官の身でありながら、あなたを憎んでしまった。これは神官として…いえ、従者としてあってはならぬ行為です。煮るなり焼くなりして私に罰をお与えください」
死なせてください。
暗にどこか疲れ切った目で罰を願う男の姿もまた、人が神に縋る理由の一つだった。
人は自らが望まずに罪を犯してしまった時に、罰を望む生き物である。
それは自分はこれだけ罰を受けたのだから、償っているはずだという安心感に浸りたいからだ。
その人間がまともであればある程。罪が大きれば大きい程。その傾向は強くなる。
そして、同じ人間から与えられるどのような罰をもってしても、罪を償えないと感じたとき。
人間は神という名の、裁きの刃に罰を求めるのである。
「……汝は主であり神である私に憎しみの感情を向け続けた。これは大罪と言えるだろう」
「はい」
「しかし、汝は同時に誰よりも真摯に敬意と信仰を持ち、私に仕え続けた。これは考慮されるべき点である」
「…はい」

神奈子の堂々と事実を述べていく物言いに、反論することなく頷いていく男。
「よって、汝には全てを私に差し出してもらう」
「神のまにまに……」
全てとは、もちろん肉体・魂・死後も含む。
少女と同じだ。そう、男は皮肉気に笑った顔を隠すように頭を下げる。
そして、神奈子からの神託が告げられる。
「さ、それじゃあ、まずはここに来なさい」
「……神奈子様。なぜ、膝の上を叩いておられるのですか？」
「膝枕をしてあげるんだから当然でしょ？」
何を当然のことを聞くのだという顔をする神奈子に、面を喰らった顔をする男。
とても先程まで重々しい空気があった空間とは思えない。
「……なぜ？」
「全てを差し出すのなら、私の手の中で死んでいきなさい。そして、来世では幸せになりなさい」
「分かり…ません…神奈子様。あなたはなぜ私をお赦しになられるのですか？」
「貴方には私に対する罪があるけど、それは私に対する献身で相殺できるわ。そもそも神は人間の憎しみも受け止める存在。私にとっては大したことじゃないのよ。それに…」
余りにも理解できない行動の連続に、男は声を震わせながらに尋ねる。
そんないっそ哀れにも見える行動にも、動揺することなく神奈子はあっけからんと話す。
「私の中の少女が貴方が幸せになることを望んでいる」
思わず息を呑む男に、神奈子は厳しい言葉をかけながらも優しく微笑む。
そもそも、男が罰せられたかった罪は神奈子へのものではない。
少女を死へと導いてしまったことへの罪だ。だから、男を救うには

少女の言葉が必要なのだ。
「貴方がしたことは間違いなく少女を死に追いやった。でも、だからといって彼女は貴方を恨んではいない。貴方と過ごした日々は幸せだったし、今でも貴方の幸せを望んでいる」
「そんな…だとしても…私(わたくし)は…」
「ほら、難しいことは考えずにあの日みたいに身を委(ゆだ)ねなさい」
状況が理解できずに混乱する男を神としてのカリスマで誘導し、膝元に招く神奈子。
そして、混乱したままの男を膝に載せてその髪を撫でる。
あの日から少年だけが成長したような光景に、男は思わず呻(うめ)く。
「今までお疲れ様でした。『貴方は何も気に病まずに黄泉路に旅立って良いのよ』そう少女も言っているわ」
「神奈子様……」
まるで少女はここに居るとでも言うように、右目で軽くウィンクをする神奈子。
男はその仕草を見た瞬間に、今までの動揺が消えたようにおかしそうに微笑む。
「あら、どうしたのかしら?」
「いえ…私(わたくし)は本当に素晴らしい主を持ったと思っただけですよ」
「そう? まあ、悪い気はしないわね」
そう言うと、男は毒気が抜かれたように表情で、静かに目を閉じる。
もう、何も見る必要はないとでも言うように。
「神奈子様、しばし眠りにつかせて頂きます。後のことは守矢の一族がやってくれるでしょう」
「…ええ、ゆっくりと眠りなさい」
「はい…神のまにまに」
体からだんだんと力が抜けていき、徐々に魂が肉体から離れ始める。
気を抜いたために、一気に体が死ぬための準備を始めたのだろう。
そんなことを神奈子が思い始めた時、男が言葉を零す。
「神奈子様…最後にお礼を」

「何かしら？」
「こんな私のために、嘘までついて下さりありがとうございます」
少女は右目を潰されていたから動かせないんですよ。
そう言って男は笑い、さらに彼女なら貴方ではなく神官さんと自分を呼ぶと続ける。
「……バレた？」
「はい…ですが…嘘でも嬉しかったです。何より幸せだったと言われて……ホッとしました」
全てはせめて男に安らかな眠りを与えたかった神奈子の優しさから来た嘘。
バツの悪そうな顔をする神奈子だったが、その顔を男が見ることはない。
目を閉じたままに満足そうに笑っているからだ。
もう、時間はない。自分でもそう悟って男は誰に向けるでもなく呟く。
「……最後にもう1つ」
ずっと言いたかった言葉を、己の罪悪感から吐き出すことすらできなかった言葉を。
最後の最後に男は告げる。
「ずっとお慕いしていました――――かなこ様」

その言葉を最後に男は静かに息を引き取る。
1人残された神奈子は、しばらく黙って眠るように目を閉じる男の顔を見つめていたが、やがて困ったように眉を寄せながら呟く。
「……どっちに言ったのか分からないわよ」
読みは同じなのだから、声だけではどちらの〝かなこ〟に向けられた言葉なのかは分からない。
それこそ、神である彼女にも分からなかった。
だが。
「あら…？　何で片目だけから涙が……」

左目から静かに涙を零す彼女には分かったのかもしれない。
「ふふっ…でも、分からない方が良いかもしれないわね」
かつて神に奉げられずに残った左の目から零れる涙が、男の顔に落ちていくが神奈子はそれを拭おうともしない。まるで、それが男への最大の供養だとでも言うように寂し気に笑うだけだ。
「お疲れ様。ゆっくりおやすみなさい――――神官さん」
そう最後に姉のように優し気な声をかけ、彼女は彼の髪を1つ撫でるのだった。